

■大豊産業 地下道点検 研究機関とロボ開発

■大豊産業

SIer
最前線

大豊産業(高松市、乾和行社長)は省力機器やインフラ機材などを手がける技術商社。販売からメンテナンスサービスまで顧客の課題解決に対応できるのが強みだ。制御盤など弱電関係の商材を得意としていたことがきっかけで、ロボット分野に進出した。「ロボットを扱うことは必然だった」と、神野孝博専務は振り返る。

ただロボット事業が成長するにつれ、外部のロボットシステムインテグレーター(SIer)への外注コストや技術対応力がネックとなり、自らSIerを手がけ始める。もともと社内にシステムエンジニア(SE)が多数在籍し、M&A(合併・買収)も積極化していたため、グループ内で技術共有し開発を進められた。

成果の一つが畜産業界への参入だ。畜産養鶏農家向けに、鶏舎で

死んだ養鶏を発見通報するロボット「Robococco(ロボココッコ)」を開発。当初は卵工場の自動化を図る提案だったが、営業担当者による顧客へのヒアリングがニーズの深掘りとなり、製品化に至った。

さらに研究機関と開発を進めるのが、インフラ施設などの地下道内の錆や劣化を早期に検知できる自律走行ロボット。鶏舎内でも容易に走行して作業を行えるロボココッコの特徴を生かし、凹凸が多い地下道内でのメンテナンス作業の省力化や効率化につながるロボットを開発中だ。

同社はロボットの普及活動にも取り組んでいる。FA・ロボットシステムインテグレーター協会主催の高校生など若者向け大会「ロボットアイデア甲子園」の四国地方予選の運営事務局を務め、2020年はコロナ禍で中止になったが、21

鶏舎内で作業する「ロボココ」



年は無事開催にこぎ着けた。

21年は団体や大学などと共催で「協働ロボット展示会」も初めて実施。22年度も同様のイベントを複数計画している。「まずはロボットを好きになってほしい。当社の活動を通じて、将来ロボットに携わる人材が育ってくれば」と神野専務は期待を込める。

【企業概要】

▷所在地=高松市寿町1の1の12▷資本金=8000万円▷売上高=111億8000万円▷従業員=236人▷設立=1949年(昭24)10月